

存療法から手術療法に変更した症例, ② 再発例と再発率, ③ 投与された抗生物質別の治療効果, ④ 入院期間ならびに入院費からみた手術施行例との比較. 【結果】① 79例中12例が手術療法に移行したが, 小児の穿孔例を経験した. ② 67例中再発症例は9例(13.4%)で全て男性であった(男性:9/42例, 女性:0/25, $p=0.0342$). 手術例は6例であったが, 12歳と77歳の2例が穿孔症例であった. ③ 投与された抗生物質は, ホスホマイシン±ミノマイシン, セフェム系が多かったが治療効果に差はなかった. ④ 入院期間は 6.58 ± 2.35 日, 入院費は $141,402 \pm 59,269$ 円で, 手術施行例の 12.8 ± 11.3 日, $361,269 \pm 153,286$ 円との間に差を認めた($p < 0.0001$). 【結論】保存的治療後の再発率は13%程度であり, 入院期間や入院費の面からみても保存的治療は妥当と考えられたが, 50歳以上や20歳未満の症例では穿孔し重篤化することがあり注意を要する.

31) Mesh plug hernioplasty の検討

長倉 成憲・石崎 悦郎 (済生会新潟第二)
相場 哲朗・川口 正樹 (病院外科)

長年鼠径ヘルニアの修復術は, Bassini 法を中心に行われてきた. しかしこれらの術式では, 縫合部にかかる緊張は避けられず, 術後の疼痛, 創部のつっぱり感を来す事になる. また文献によると, この緊張で縫合部の壊死が起り再発につながると考えられている.

当院では, 1995年より polypropylene mesh (Marlex mesh) を用いた tension-free hernioplasty (以下 Mesh 法) を施行している. 1993年以降成人鼠径ヘルニア手術を施行した患者にアンケート調査を行い, Bassini 法と Mesh 法について比較検討したので報告する. 入院日数, 術後の疼痛ならびにつっぱり感を自覚した日数ではいずれも Mesh 法の方が有意に短かった. 創感染, Mesh に対する拒絶反応, 再発を認めた例は現在までのところ無く, 本術式は成人鼠径ヘルニアに対し有用と考えられる.

32) 再発成人鼠径大腿ヘルニアの検討

早見 守仁・関矢 忠愛
斉藤 六温・吉田 正弘 (刈羽郡総合病院)
杉本不二雄 (外科)

近年, 成人鼠径, 大腿ヘルニアに対し, より再発の少ない術式について様々な検討がなされている. 当科でも

幾つかの術式を採用し, 再発の減少につとめてきたが, なおその消滅には至っていない. そこで, 今回, 自験, 再発鼠径大腿ヘルニア, につき再発予防の面から検討した. 当科で平成元年以降, 手術が行われた再発ヘルニアは外鼠径ヘルニア型9例, 内鼠径ヘルニア限局型5例, 内鼠径ヘルニアび漫型2例, 大腿ヘルニア型4例の計20例であった. Mizrachy 法後の再発は外鼠径型2例, 大腿型1例で内鼠径型は認めなかった. 再発までの期間は, 3年以内と5年以上とに区別され, その成因が異なることが示唆された. 外鼠径型再発は晩期に多く見られ, 大腿型再発は早期に多い傾向が見られた.

33) 当科で経験した Aggressive angiomyxoma の1例

清水 孝王・三科 武
鈴木 聡・飯沼 泰史 (鶴岡市立荘内病院)
斉藤 博・鈴木 伸男 (外科)

我々は, 骨盤内に発生した稀な腫瘍 Aggressive angiomyxoma (AAM) の1例を経験したので, 報告する. 症例は45歳の女性. 1994年1月頃より左外陰部の腫脹を認め, 近医にてバルトリン腺嚢腫の診断で開窓術を受けた. しかし腫脹は改善せず, 当院婦人科で精査の結果, 後腹膜腫瘍と診断され当科紹介となった. 1994年7月14日腫瘍摘出術を施行. 腫瘍はゼラチン様で骨盤腔左側に充満していた. 病理診断にて AAM と診断され follow-up となった. その後1995年2月のCTで骨盤腔内に再発がみられ, 同年7月31日経仙骨の腫瘍摘出術を施行した. AAM は骨盤内や会陰部に発生し, 血管増生・局所浸潤・再発性を特徴とする粘液腫様の極めて稀な腫瘍である.

34) 著明な低ナトリウム血症を呈した2例

佐藤 友威・草間 昭夫
角南 栄二・岡村 直孝
若桑 隆二・田島 健三 (長岡赤十字病院)
和田 寛治 (外科)
広田 雅行 (同 小児外科)

消化器癌の経過中に著明な血清電解質異常を来した2症例を経験したので報告する. 1例は直腸癌にて低位前方切除を施行, 術後縫合不全にて, ドレナージ手術を施行したところ, 著明な低 Na 血症と精神障害を呈した例である. 他の一例は幽門狭窄を伴った胃癌症例で, 入院精査中に著明な低 Na 血症を呈した例である. いず

れも長期間の経口摂取不能による低栄養状態と高齢に伴う腎予備力の低下不適当な栄養輸液管理により低 Na血症が生じたと考えられた。

患者状態の把握と適切な栄養管理，輸液管理が必要であり，原疾患の治療を含め，総合的な患者管理が重要と考えられた。

35) 当科において経験した胆嚢茎捻転の2症例について

本間 英之・小山 真
北条 俊也・坂下 滉
下田 聡・武田 信夫 (県立新発田病院
 阜山 悟 (外科)

【要旨】胆嚢茎捻転は比較的稀な疾患であり，典型的には高齢女性に多いとされ，高齢化の進む昨今では急性腹痛の鑑別疾患として考慮が必要な疾患の1つである。しかし術前診断は困難であり，開腹後に診断される場合が多い。最近当科では，高齢女性に発症した胆嚢茎捻転を2例経験したので報告する。

【症例1】：82歳女性，主訴：腹痛，嘔吐，術前診断：腸閉塞症，術中所見：360°時計方向回転の胆嚢茎捻転と診断。【症例2】：86歳女性，主訴：腹痛，嘔気，術前診断：急性胆嚢炎，術中所見：360°時計方向回転の胆嚢茎捻転と診断。【結語】既報告例と比較し，典型的な症例であり，良好に回復した。

36) 十二指腸乳頭部癌に合併した多発性微小膵癌の1例

皆川 昌広・伊賀 芳朗
村山 裕一・清水 春夫 (村上総合病院外科)
佐藤 信昭・内田 克之
飯合 恒夫 (新潟大学第一外科)
松林 宏行 (新潟大学第一病理)

乳頭部癌と膵癌との重複は稀であるが，今回我々は乳頭部癌切除後の膵管内に微小癌が多発して認められた1例を経験したので報告する。症例は60歳女性，平成7年7月上旬より右季肋部痛が出現し，当院を受診した。精査にて乳頭部に腫瘤を認め，生検により腺癌と診断され，8月7日全胃幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。病理組織学的に腺癌 (tubl)，露出潰瘍腫瘍型，Acdpb，INF β ，panc0，d2，ly0，v0，n(-)，pn0，w0，2.0×1.8×0.4 cm と診断された。さらに，切除した膵頭部膵管内に1 cm 以下の微小癌 (tubl) が5ヶ所に認められ，Ph，ly0，v0，n(-)，pw(-) と診断された。

37) 十二指腸球部温存膵頭十二指腸切除術を施行した十二指腸乳頭部早期癌の2例

阿部 要一・森永 秀夫
山田 明 (木戸病院外科)
横田 剛・佐藤 栄午 (同 内科)

症例1：61才女性，直腸癌の術前スクリーニングとしての上部消化管内視鏡検査にて十二指腸乳頭部微小癌を発見し，直腸癌に対する低位前方切除術から約2か月半後の平成7年5月23日に十二指腸球部温存膵頭十二指腸切除術を施行した。乳頭部に露出腫瘍型の腫瘍があり，病理組織学的には腺腫を伴った高分化腺癌，od，ly0，v0，pno，panc0，do β ，n(-)，癌部は大きさ3×2 mm，占居部位 Ac であった。

症例2：63才男性，9年前から慢性胃炎にて経過観察中，平成7年6月頃より腹部膨満感が出現し，8月16日上部消化管内視鏡検査を施行すると，十二指腸乳頭部に軽度な不整，発赤を伴う腫瘍様病変を認め，生検にて腺癌の診断であった。平成7年10月12日に十二指腸球部温存膵頭十二指腸切除術を施行した。乳頭部に露出腫瘍型の腫瘍があり，病理組織学的には高分化腺癌 m，ly0，v0，panc0，do，n(-) 癌部は大きさ1.5×1.2×1.0 cm，占居部位 Acbd であった。

38) 当院における内視鏡下外科手術の検討

宮下 薫・田中 陽一
山本 哲久・永島 伸夫
大黒 善彌 (燕労災病院外科)
伊賀 芳朗 (村上総合病院外科)
中村 茂樹 (県立加茂病院外科)

1992年に腹腔鏡下手術を導入し，同年7月9日から胆石症に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術を開始した。今回は胆石症，食道疾患，十二指腸潰瘍穿孔，大腸癌（大腸内視鏡によるものを除く），鼠径ヘルニア，腸閉塞症の内視鏡的治療，内視鏡的胃瘻造設の現況と問題点について報告する。腹腔鏡下胆嚢摘出術は1994年3月までは気腹法で行い，合併症を避けるために適応を厳しくし，炎症が高度と考えられ症例は開腹としていた。4月からは吊り上げ法も導入し基本的には腹腔鏡下胆嚢摘出術を第一選択とした。小切開による開腹術に移行した症例は3例で原因は出血1例，剝離困難が2例であった。術後合併症では少量の出血が続いた2例と総胆管結石症例では胆汁瀦留を認めた1例であった。